

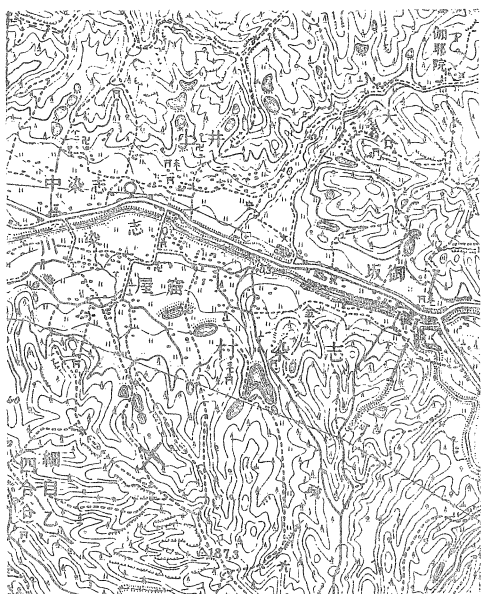
兵庫県三木市志染町出土の経筒と埋納経典

武 藤 誠

一

兵庫県三木市志染町（播磨国美囊郡志染村）から出土した銅製経筒は、仁平三年（一一五三年）の銘を有するところから、早くより学界に知られ、経塚遺跡地名表や金石年表に採録されているので、研究者によく知られている。もっとも早い本経筒に関する報告は、明治三十一年十月発行の「考古学会雑誌」第二篇第六号の雑報欄に「播磨国発見の鍍銀製経筒」と題して記載された記事で「播磨国美囊郡窟屋村溜池普請の際、同村字寺ヶ谷山林の右下より発見せる鍍銀製経筒は、高さ九寸、周囲一尺三寸あり、形状図の如く蓋あり、筒中に法華経八巻ありし、筒面には左の文字あり」と記し、銘文を録している。この記事は短文であるが経筒発見当時の状況に触れている点注意すべきものである。

明治四十年五月発行の「考古界」第六篇第八号に収載された高橋健自氏の「経筒沿革考」は、経筒全般に対する基礎的研究の最初の文献であるが、その中に収められた経筒年表にこの経筒を録し、発見の年を明治十七年と記し、そ

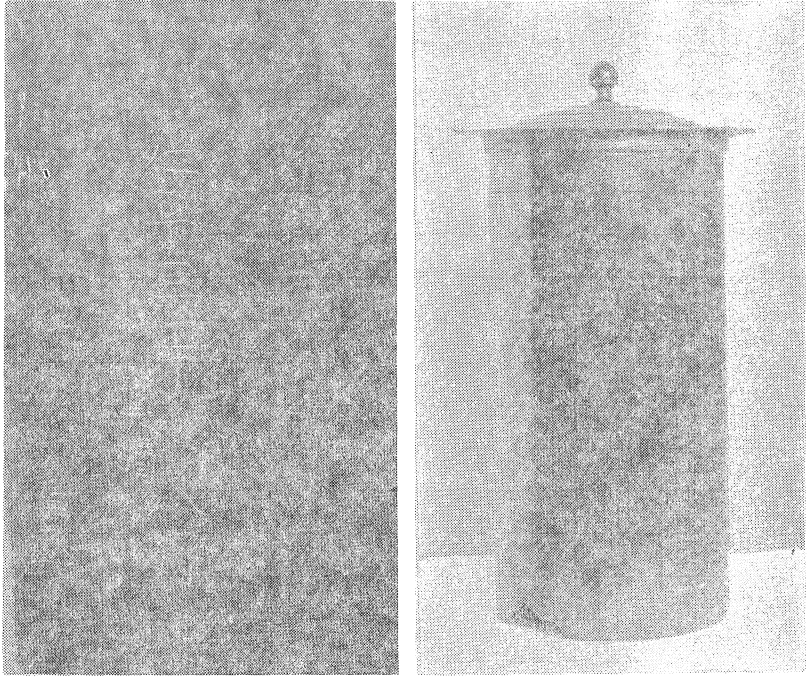


第1図 経塚所在地附近地図
×印 経塚所在地点
国土地理院5万分地図

の典拠として「兵庫県届書」と記している。さらに個々の遺物説明の部に「播磨国美囊郡志染村発掘のものにして、予未だ実物を見ざれども、発掘当時その筋へ差出したる届書によれば左の如し」と記して銘文を録してある。

その後の経塚研究の主要文献である『考古学講座』所収の石田茂作氏の「経塚」〔昭和四年刊〕や、竹内理三氏の『平安遺文——金石文篇——』にこの経筒と銘文が採られていることは上述の通りである。

このような既知の遺物をここに再びとりあげて調査報告しようとするのは次の理由と機縁によるのである。すなわち本例の如く、早く発見された出土資料についての調査記録は、その出土状況や関係遺物全体にわたる調査が十分でないのが常であり、今日それを究明しておかないと全く不明に帰するおそれがあり、とくに伴出関係遺物の如きは紛失の場合さえ生じることが憂慮されるからである。本例の場合は、幸いに今日までほぼ発見当時のままで伝えられている埋納の経典や外容器についてそのことがいえる。このことにつきわれわれの注意を喚起したのは田岡香逸氏である。田岡氏は昭和三十五年十月、三木地方史料採訪の際、この経筒が志染町高男寺三五七番地金井政治氏の保管となっていることを知り調査したところ、経典や外容器が伝蔵されているが、それらが未調査かつ破損した状況にあることを見て、この貴重な一括遺物の調査と保存措



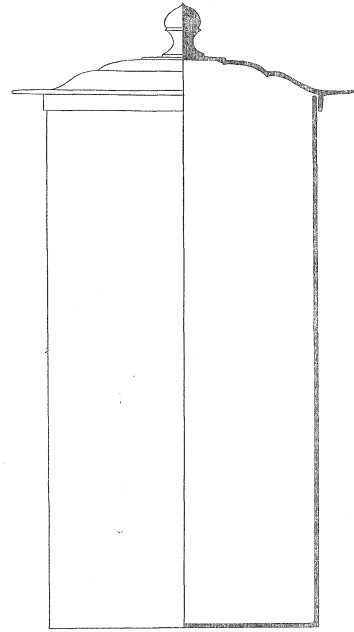
第2図 經筒と針書銘文

置を要望する一文を「みなぎの通信」創刊号（昭和三十六年刊）に載せ、関係者の注意を促した。これが本調査の機縁となったことを記して田岡氏の配慮に謝意を表する。

二

經筒は円筒式銅鑄製で、铸上りよく、表面平滑、鍍銀がなされ、いまそのため黒い美しい光澤を呈している。内面には磨きがなく、緑色の錆が全面に出ている。

筒身は高さ二四・五糎、底は平底で、外径一二・四糎、底の厚さ一・五糎。口径は外径一二・三糎、内径一二糎を測る。蓋は宝珠をのせたつまみを具えた傘蓋式で、筒身の外に蓋のはまる外蓋である。径一五・八糎を測り、周縁は円形で、径七・五糎と径三・七糎の二つの同心円で三区に画され、中央に径



5 c.m.

第3図 経筒実測図

一・八纏、高さ一・三纏の鼓形の座をおき、その上に径一・六纏、高さ一・一纏の形のよい宝珠をのせ、総高さ二・四纏の完好のつまみとなつてゐる。蓋の総高さは四・九纏、周縁から順次もり上る曲線が二つの同心円でしめくくられ、美しい側面観をもつてゐる。蓋の厚さは一・八耗乃至二耗で、蓋をのせた経筒全体の高さは二八・七纏。全体としてよく調和がとれ、安定感がある。保存は比較的よいが下端に小欠損部があり、蓋にすこしくひずみがある。

銘文は、筒身に巾七纏にわたり、三行二十三字が針書きで刻まれている。

勸進 聖人進西

仁平三年 歲次 八月 日
癸酉

結縁 女 雀部氏

第一行は筒身の先端から三纏下よりはじまり一一・二纏でおわる。第二行は四・八纏下よりはじまり一四・五纏でおわる。第三行は八纏下よりはじまり一四・五纏でおわる。針書きであるが文字鮮明、かつ当代の書風をよく示している。〔平安遺文〕採録のこの銘文は、第二行（と第三行が入れちがつてゐる。）

埋納経典は紙本墨書経である。埋経に紙本経が用いられる場合、永く土中にあるために湿害をうけて原形を失う程に損傷するのが多いのであるが、本例は非常によく旧態を保っているのはめづらしいことといえよう。

料紙は豎二三・五種、幅五三種内外の楮紙（白紙）で、墨書の文字はすこし薄くなっているが、比較的よくのこっている。全体に淡緑色を呈しているのは、水にとけた緑錆によって染められたものらしい。

経典は、藤原時代の経塚埋納の経典の多くが法華経である例に洩れず、卷子本の妙法蓮華経八巻と般若心経である。般若心経は離脱した断簡一括の中から、今次調査によって見出された。

経典の遺存状況は左の通りである。

妙法蓮華経

巻第一 現存長さ七・九五米。巻首の部分に若干損傷がある。巻尾十五行を欠く。

巻第二 現存長さ九・八二米。巻尾一〇行を欠く。

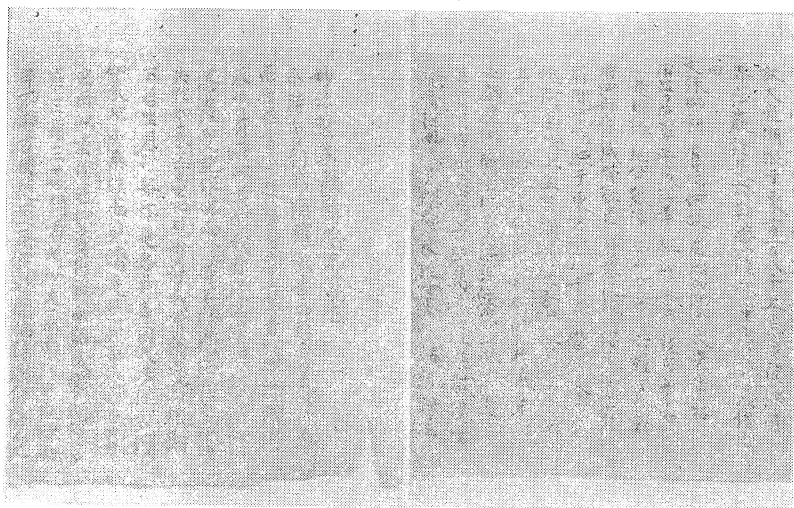
巻第三 現存長さ七・四八米。巻尾二四行を欠く。巻首に木製棒軸あり。

巻第四 現存長さ八・一九米。巻尾九行を欠く。

巻第五 現存長さ八・四八米。巻尾一四行を欠く。

巻第六 現存長さ八・四五米。巻尾一四行を欠く。

巻第七 首尾完存。長さ八・一八米。巻尾に木製棒軸がある。



第4図 卷第一 序品と卷二 譬喩品の一部

卷第八 現存長さ四・六五米。他に離脱した三紙があり、これを加えて長さ六米。卷尾約二紙分を欠く。損欠もつとも著しい。

般若心経

縦、横約二三種の正方形の紙とその半截紙の二枚にわたり書かれてあり、両紙離れて断筒となっている。装潢の旧態は不明である。

以上経典の遺存状況を見ると、卷第一を除きすべて巻尾を欠いていることが注意される。これは経典書写ののち、巻きかえさずに、巻尾を上にして筒中に納めたことを物語るものである。このような例は他にも多く見られるところである。

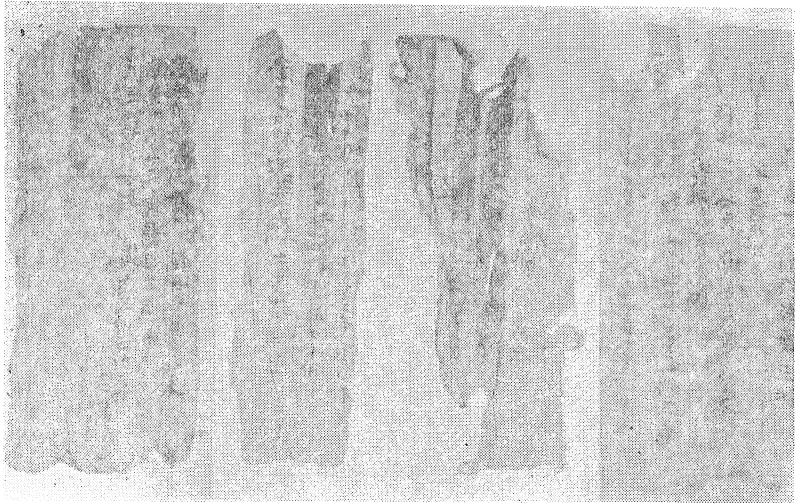
このように巻末を欠くので奥書を検すること困難であるが、巻尾まで完存する卷第七に左の奥書があるので、断筒となっている紙片を調査した結果次に記す奥書を見出すことが出来た。

卷第七奥書

妙法蓮華経卷第七

南無釈迦牟尼如来

南無多宝如来



第5図 卷七奥書(右端) および断筒に見える奥書(左より一・三・二)

南無十方分身諸釈迦牟尼仏

南無妙法蓮華経 南無十方三世一切三宝

直遇頂礼 僧 西 詠

断筒 一

南無釈迦牟尼如来 南無多宝如来

南無十方分身諸釈迦牟尼仏

南無妙法蓮華経 南無十方一切三世三宝

順 覚

断筒 二

結 縁 衆 僧 忠

牟尼仏 南無多宝

諸釈迦牟尼仏

南無妙法蓮華経 南無十方三世

断筒 三

南無釈迦牟尼仏 南無多宝仏

南無十方分身諸釈迦牟尼仏

南無妙法蓮華経 南無十方三世一切三宝

断筒 四

卷第六

如来 南無阿弥

南無十方分身諸釈迦牟尼仏

南無妙法蓮華経 南無十方三世一切三宝

断筒 五

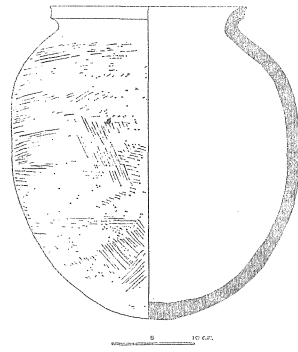
月十四日

これら断筒は墨色も非常にうすくなり、紙も汚損していて辛じて判読できる程度であるが、偈名を見出し得るものあることは注意すべきである。月日を記したものが存するが一部断片しか残存しないのは惜しい。

写経の文字は当代の書風を示しているが概して稚拙で、巻毎に巧拙の差が明かに認められ、筆者を異にしていることがうかがえる。全巻を通じて界線を引いていない。

四

外容器の甕は、高さ三八糎、深さ三五・八糎、口径二三・五糎、頸部の内径一九・二糎、胴の径三四糎、厚さ約一・五糎の須恵器で、表面に条痕文たたき目があり、器形にややひびみがある。伝蔵中に破損し、一部破片が失なわれた



第6図 外容器甕実測図

が、田岡氏と川村明雄氏の斡旋で本学考古学研究会員の手で復原修理が行われた。この甕は経筒を埋置するとき、従来存したものを外容器に用いたのであって、その製作年代は経塚築造年代より遡るものである。埋納のときどのような用い方をしたか明かでなく、当然蓋に用いた器もあったと思われるが、いまは全く不明である。発見当時の模様を物語る口誦の伝承によると、なお一つの壺があり、経筒はその中に納められていたというがもとより明確ではない。

五

経筒出土地、すなわち本経筒を主体とする経塚の営まれた地は、発見当時の美禰郡窟屋村、のちの志染村大字窟屋、現在の三木市志染町高男寺部落に属する地で、美禰郡の首邑三木町から東方約五軒に当る。標高約一三〇米の丘陵尾根からすこしく下ったところで、北方への眺望が開け、一・五軒許りの距離をへだてて志染川を見下ろす景勝の

地である。ここは往時の高男山高男寺の寺域であるという。高男寺は天正年間羽柴秀吉が三木城の別所長治を討ったとき、兵火のため堂宇悉皆灰燼に帰し、廃寺となった寺といわれ、その由緒、寺歴を明かにしないが、欽明天皇の勅願所であり、また嵯峨天皇の御祈願所であったという縁起を伝えている。もとよりそのような由緒はそのまま信じ難いが、古代から中世にかけて地方の名刹としての隆昌を見た時期があったと考えられる。寺院背後の丘陵上に経塚が営まれる例は多く見るところである。この経塚の位置は地形的に相応しい特徴が認められるだけでなく、寺院との由縁においても考慮すべきものがある。高男寺の研究を今後に期したい。

里人が如何なる動機で経塚発掘を行なったか、またその地点が経塚としての外見上の形態をもっていたか、さらに外容器の甕や経筒の埋置状態、筒内経典の埋納状況など、すでに今日になっては知ることが出来なくなっている。出土地点も次第に不明になって行くであろう。上記の明治三十一年の考古学会雑誌の記事に「石下より発見」とあるのが注意をひく。近年まで出土地点には発掘のときにあった石を目じるしに置いていたと里人が語っているところから推察すれば、経塚構築石材の一部が当時現場に遺棄されたと考えられる。従って今日調査発掘を試みれば遺構の一部を明かになし得るかも知れない。しかし外容器の甕の形状より察すると、直接甕を土坑中に納め、石又は土器で蓋をしたとも考えられるから遺構は見出されないとも思える。

経筒発見後、兵庫県を経て中央官庁に届出が行われ、遺物も一括して東京に運ばれたという。このように公的な措置がなされたのであるから、恐らく他の埋納遺物はなかったであろう。これも今後の調査によって明かにする可能性があらう。

高橋健自氏の文中に記されている「兵庫県屈書」がどのような公文書であるか明かでないが、若し発見状況を記述してあるものであれば、経塚の構造を知る有力な資料である。しかし中央官庁の文書は大正震災又は今次戦災で失な

われたと思えるし、兵庫県公文書は、戦災で焼亡したので探索は困難であろう。

六

本経塚が営造された仁平三年（一一五三年）のころは埋経の背景をなす末法思想がもつとも深刻に人心を動かした時期で、経塚築造が盛行した時代である。この年の前後十年間、すなわち一一五〇年代（久安・仁平・久寿・保元・平治年間）における経塚の事例は前記石田茂作氏の経塚年表に載せられたもの十二例をかぞえる。また播磨国においても、この年から遡る十年、康治二年（一一四三年）および天養元年（一一四四年）の紀年をもつ瓦経を出した神崎郡香呂村（現在香寺町須加院）の常福寺経塚があり、経筒銘に久安五年（一一四九年）の紀年をもつ多可郡黒田庄村大字福地の例がある。此の地に近い三木市別所の在田寺境内に見出された、瓦経を納めた経塚は年代を明かにしないが、およそこの時期のものである。永久五年（一一一七年）の血書経残片を伴うことで注目される美囊郡上淡河村石峯寺経塚の位置は、この地の東北約十料の距離にある。地域的にも年代的にも、盛んな埋経風習をみとめ得る。

本経塚を営むに至る経緯は経筒銘と奥書によっておよそ明かである。僧進西の勸進によって、雀部氏の一女性が資を出し、埋納する経典は僧西詠、順覚、僧忠らが書写したのである。書写奥書が巻第六・巻第七ほか三巻分判明したことから推して、欠失したのこりの三巻の末尾部分にも奥書があったかと思われ、かつ各巻文字の巧拙、書風を異にするところから、各巻を一人宛分担書写するいわゆる一卷経であったかと推考される。

寄進者である雀部氏の考察、その他残された問題があるが、ここでは経塚出土一括遺物の資料としての調査報告にとどめる。

附記

遺物の所有者は現在高男寺公民会、保管者は金井政治となっている。経筒、経典、壺は一括して昭和三十七年、兵庫県指定文化財となった。

なお、本調査は筆者が兵庫県文化財専門委員として行なったものである。そのため、兵庫県教育委員会、三木市教育委員会の援助をうけ、保管者金井政治氏、三木高校岡本道夫氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

——関西学院大学文学部教授——